

中大卒のパラリンピック金メダリスト

お び な た く に こ

大日方邦子さん

「障害は個性」・・・

いまトップアスリートとして

トリノ五輪の日本不振に比べて、パラリンピック日本選手団の活躍はめざましかった。なかでも、大日方邦子さん。金メダル1、銀メダル2の大活躍で選手団を牽引した。メダリストは1996(平成8)年、中央大学法学部卒。NHKディレクターでもある。「障害は個性」という言葉の重みと輝きを何度もかみしめるインタビューになった。

学生記者 滝沢孝祐(総合政策学部3年)

金1、銀2の大活躍

パラリンピック——「平行」をあらわす「パラレル」と、「オリンピック」を重ねて、「もうひとつのオリンピック」。体に障害のある人のオリンピックだ。2月26日閉幕した五輪のあと、3月10日から10日間、同じ会場で開催された。

日本選手団は金2、銀5、銅2のメダル9個と大いに気を吐いた。金メダル数が前回ソルトレーク大会の「92」から「58」に減ったにもかかわらず、である。

このなかで、大日方さんは、

△金メダル▽女子大回転座位

△銀メダル▽女子滑降座位、女子

スーパード回転座位

ノルウェー・リレハンメル大会出場以降通算でメダル8個となる活躍だった。

どうしても、五輪組との比較になる。

女子フィギュア・荒川静香さんの「有終の金」で日本選手団はやっと面目を保ったようなものだった。だからよけいに「イナバウアー」の美に列

島が酔いしれたのだけけれど。

「一概に比較はできないですよ。ね。選手層も違うし、レベル、環境も違いますからね」

大日方さんは静かに、加熱をたしなめるように語るのだった(のちの会話で、その違いは詳しく聞くことになる)。

——東京・代々木のNHK番組広報の応接室。大日方さんは車イスで入室し、「歩けますから、どこに座りましょうか」と撮影しやすい場所をたずねてから、腰をかけた。

チエアスキー：

危険より全身感の醍醐味

それにしても、競技の映像に目を見張った。チエアスキーという。足をカバーする座位のまま急斜面を飛ぶように滑る「滑降」、エッジをきかせた「大回転」、「スーパード回転」……。つい、怖さはないですか、と聞いた。

「スキーは外的な力を自分の中へ取り込んで、如何にバランスを保つか。この点が最も難しいし、その半面で



「自分のペースで競技できた」と語る大日方邦子さん

おもしろいスポーツなんです。自らの重力やスキー板からの反発力、そして遠心力などをコントロールして、これらの力を三位一体で融合させる魅力ですね。身体全体の充実感。大回転ではそれを感じることができました」

「4回目の出場となった今回は、競技に必要な情報すべてを削ぎ落とし、競技に集中しました。そのためか、自分のペースで試合運びのしやすい大会でした。だから、競技以外のことはあまり覚えていませんですよ」

「以前から聞いていた通り、イタリア人はテンションが高かったですよ。よく言えば大らか、悪く言うなら大雑把で（笑）。例えば、選手村の出入りには金属探知機を通す厳重なセキュリティチェックがあるのですが、日が経つにつれてチェックが緩やかになったのは、イタリア人らしいのでしょう。あるとき、出入りに必要なIDカードが見あたらずに焦って

いたところ、たまたま首にかけていた金メダルを見せたら顔パス。このメダルが目に入らぬか、という勢いで（笑）」

パラリンピックに初めて出場したのは、大学2年の94年リレハンメル大会。当時を知る職員によれば、「メダルこそとれなかったものの、テレビ画面を通じて学部事務室がわいた」という。

障害を超えて

17歳でスキーとの出会い

3歳のとき、交通事故で足の障害を負った。「大変さはもちろんだけれど、障害は私の個性。障害者であることを受け入れることで、前向きな生き方ができるようになりました」……そして、17歳のある日。いつものように義足を調整するため、横浜にあるリハビリテーションセンターへ出かけたときのことだった。

「そこで初めてチェアスキーという用具を目にしたんです。スキーをやってみたくて、漠然と思っていたのですが、チェアスキーを知って

『これなら、できるかも』と、いうような感じで始めたのがきっかけです。

でも、当時はチェアスキーが可能なスキー場を探すのは大変だったのよ。手ぶらでスキー場に行つて用具をレンタルすることはできないし、一般的な認知がまだなかったので、チェアスキーの安全性に首をかしげる人もいましたから」

当時はまだ長野で冬季オリンピックやパラリンピックが開かれる前で、障害者スポーツはまさに冬の時代。スポーツも競技というよりは、リハビリテーションの一環として捉えられていた。

「最初から競技スキーへ進むとは、全く考えていませんでした。まさにゲレンデスキーヤーだったので、大学時代にたまたま「競技スキーをやらなにか」と、声をかけられたんです。私に根性があるように見えたらしいですね（笑）」

キャンパスの長い坂、階段

同席した女子ラクロス部の河原幸

代さん（総合政策学部4年）は身近にいる車イスの友人の話を引きながら、「バリア・フリー」の点では十分ではない大学環境に触れた。大日方さんは、「そうですね」とうなずきながら、「中大を選んだ理由？

交通事故に遭った際に、弁護士さんにとってもお世話になった。私も弁護士になって社会で困っている人を助けたいと、高校時代から思っていたんですね。だから、法科の中央へ。でも、すぐに甘かったかな、と「も」。そう振り返った。

当時はモノレールさえない。「歩くことができるので、多摩センター駅から路線バスに乗って通学していたのですが、私の身体にとっては大きな負担でした。バスに乗るため長蛇の列に並び、バスから降りて正門まではまた長い坂と階段……」

バス停から、座席に着くまで30分かかることもあったという。前期3カ月が終わった夏休み、事務室に相談して、後期からは自動車通学が認められた。「車で通学できなければ、大学を辞めていましたね」。さらに

と言つてのけるが、学内の移動の大きさは変わらなかった。

司法試験をめざすか、スキーに賭けるか。これも大きな決断である。「勉強するうちに、懂れていた弁



護士は『本当にやりたい仕事なのか』と自問自答することが増えてきた。それは、スキーをする中で視野が広がったからだと思います。自分がいかに小さく、画一的な社会の中に

たのかがわかつたんです。

また、スキーヤーとしても実績が出始めた時期でした。パラリンピックで金メダルをめざしながら、弁護士をめざす。そんな道もあったけれど、

どちらも中途半端になりそうで嫌だった。このままではいつまでも司法試験に受からずに、ずるずると受験浪人して、目的を見失うのではという不安がありましたしね。結局、決断は正しかったと思つていますよ」

取材中の滝沢と河原幸代さん（右）

選手支援体制の「格差」 次回大会出場は「未定」

98年は、日本の障害者スポーツにとって大きな転換点となった年だ。札幌に続き、日本では2度目の開催となった長野冬季五輪と、冬季パラリンピック。

そこから今大会メダル9個の大飛躍へ。たとえば、大会前、読売新聞のコラム「今日のノート」（2月19日付）は、「練習環境や受皿が整っ

ていないパラリンピックの選手にとって検舞台の結果は大きい」と期待をこめた。

冒頭の比較話に戻って、チェア・スキーの第一人者は、表情がすこし硬くなる。

「五輪と比較して、今冬のパラリンピックの成果が伝えられますが、それは決してパラリンピックに対する日本の支援体制が成功したからではないと思います。メダルがたくさん獲れたのも当事者の努力に頼っている部分が大きい。たとえば、スキー競技をしていく上では最低でも年間300万円もの自己資金が必要です。日本は五輪と違い、強化や支援体制なども十分ではないのです。トップ選手を育てていくための環境では、世界にはまだまだ及んでいません」

五輪やパラリンピック代表選手を首相官邸に招いた「記念品授与式」でも、障害者スポーツの現状と支援の強化を小泉総理や小坂文部科学大臣、そして川崎厚生労働大臣に直言したという。

冬の大会ではアスリートだが、夏



「障害者スポーツの環境改善に支援を」

の大会ではディレクター・取材者としてパラリンピックを見つめる。2000年のシドニー、そしてアテネでは取材チームの一員として現地に赴いた。

「夏のパラリンピックでは、障害者スポーツについて結果を伝えるだけにとどまらず、現状の課題などを整理して、細かい演出を含めて発信していきました。演出の仕方、発言

の取り上げ方ひとつで視聴者が抱く印象は大きく変わるの、テレビの特徴ですね」

報道が抱える問題。「一つの出来事の中の部分に注目して、全体の中から切り取って伝えていくのか。例えば首相官邸での記念品授与式。多くのメディアが小泉首相の『感動した』という言葉と、総理が荒川選手

の金メダルを手に取り『重いねえ』と感動している姿を報道しました。

私は代表挨拶のなかで、『パラリンピックをめぐる日本選手のおかれた環境の問題点・競技環境の充実や、一過性でない継続的な支援』を訴えました。けれども、メディアではほとんど取り上げられなかった。限られたスペース（紙面や放送枠）で何を

伝えるべきか、優先順位をつけることは当然です。結果的には、私の挨拶は伝えるべき内容としては優先順位が低い、と伝え手が判断したことになります。『感動』もいいけれど、『現状の課題』にも踏み込んでほしいかった。それが本音です。ひとりのメディアに生きる人間としては、その部分が葛藤です」

4年後の2010年カナダ・バンクーバー冬季パラリンピック。出場については、それらすべての問題がかかわってくるようだ。こう話した。「出場するかどうかなどは、まだ決めていません。ただ、もし出場するのであればトリノ以上の結果をめざしたいと思っています。そのためにも、障害者スポーツをめぐる環境が少しでも好転できるように、まずは障害者スポーツの土壌、環境づくりに取り組んでいきたいと考えています」

中大生よ、スマートな人間に

NHKではディレクターとして学術教育番組の制作にあたっている。

現在は、小学2年生を対象とした国語番組の制作がメインだという。

「この仕事のおもしろいところは、どんなに主観を排除しようとしても、作り手の価値観や主観が映像に反映される点です。どういうメッセージを込めて、視聴者に発信するのか。未来を担う子供たちへ向かって、番組で取り上げる読み聞かせの作品などに引き込みたいので、出演者には、『カメラの先にいる子供たちの目をしっかりと見つめるつもりで語りかけてください』と、強くお願いしています。語り手に力があればこそ、子どもたちは引き込まれるんです」

目の力を、大日方ディレクター自身に感じていた。

優しい目になって、ふたりに話した。中大生へのメッセージである。「かつていい、スマートな人間になってください。ちよつとした優しさや思いやりを持つことができるかで、スマートであるかどうか変わってきます。そんな心の譲り合いや社会を広く見る目を養ってほしいと思いますね」